

インターネット公開許諾のない文章には墨塗り処理を施しています。

リュバック著『アミダ』第7章「法然と浄土宗」 における問題点

竹内真道

〈はじめに〉

アンリ・ドゥ・リュバック著『アミダ』(Henri de Lubac, *Aspects du Bouddhisme*, II, 《Amida》, Paris, Éditions du Seuil, 1955.) は、浄土教についてのフランス語の著作で、全13章から成り、インド・中国・日本の浄土教が紹介されている。

著者のリュバック神父は、1896年フランスに生まれたカトリックの神学者で、リヨン・カトリック学院の教授を務め、後に枢機卿に任命されている。⁽¹⁾

さて、この『アミダ』の第7章は「法然と浄土宗」と題され、20ページに渡って法然上人のことが述べられている。以下は、この第7章について調べたものである。

1. 参考・引用文献について

『アミダ』第7章で参考・引用されている主な文献は、次のものである。

まず重要なのは、1925年に発行された石塚龍學・H. H. コーツ両師による『勅修御伝法然上人行状絵図』の英訳と注解《Hōnen the Buddhist Saint, his life and teaching, compiled by imperial order.》(Translation, historical introduction, explanatory and critical Notes by Rev. Harper Havelock Coats, M. A., D. D. and Rev. Ryūgaku Ishizuka, Kyoto, 1925.) である(以下、HBS と略す⁽²⁾)。このHBSをリュバック神父は、『アミダ』の注で、「我々は既に、しばしばこの最も重要な著作に拠っている。」と述べ、『アミダ』第7章の注、全46箇所のうち13箇所を、HBSから引いている。『アミダ』第7章の法然上人の生涯は、ほとんどこの書をもとに書かれているといつてよい。

次に重要なのは、姉崎正治著の英文『日本宗教史』(Masaharu Anesaki, 《History of Japanese Religion》, London, 1930.) (以下、HJR と略す) で、7箇所の注に用いられている。

この他、Charles Eliot の《Japanese Buddhism》(London, 1935.) が4箇所の注に、Léon Wiegier の《Amidisme Chinois et Japonais》(Hsien-hsien, 1928.) が4箇所の注に、フランス語の仏教辞典《Hōbōgirin (法宝義林)》(Paris, Tokyo, 1928～.) が3箇所の注に、それぞれ用いられている。⁽⁴⁾

2. 用語について

仏教関係の言葉に、どのようなフランス語が使われているかを調べた。日本語・それに対するフランス語とその和訳・コメント——の順に並べた。

あわれみ/faevur⁽⁶⁾——「恩恵」。『一枚起請文』の「二尊のあはれみにはづれ」の「あわれみ」の仏訳である。HBSでは'mercy'⁽⁷⁾が用いられている。

庵/retraite⁽⁸⁾——「引退所」。吉水の草庵に用いられている。'retraite'は[re(元へ)+traire(引く)の過去分詞]⁽⁹⁾から

成り、法然上人が出家して比叡山に入り、山を下りて再び世間に戻って吉水に住したことから、この語が用いられたのだらうか。HBS には ‘retreat’⁽⁶¹⁾ が使われており、リュバック神父はこれに合わせたと思われる。尚、カトリックでは ‘retraite’ は「黙想」⁽⁶¹⁾ の意で、それは「自分の霊的生活に必要な決心をするために俗界を一定期間離れ黙想・反省・祈りの時を過ごすこと」とされている。

一枚起請文/《Testament sur un bout de papier》——「一枚の遺言」。HBS では “One-Sheet Document”⁽⁶³⁾。

往生/renaissance⁽⁶⁴⁾——「再生」。⁽⁶⁴⁾ [re (再び)+naître (生まれる)] の名詞形。HBS では ‘to be born into the Pure Land’⁽⁶⁴⁾。

観想/contemplation⁽⁶⁷⁾——「熟視・観想」。浄土の仏の像の「観想」に用いられている。

観無量寿経/Sūtra de la Méditation⁽⁶⁸⁾——「瞑想の経」。HBS では ‘the Sūtra on Meditation on the Buddha of Eternal Life’⁽⁶⁸⁾ とされ、高橋順次郎英訳『観無量寿経』(以下、SMA と略す) では ‘the Sūtra of the Meditation on Amitāyus’⁽⁶⁸⁾ とされている。

決定心/confiance, absolu et définitif⁽⁶¹⁾——「絶対的決定的信頼」。『往生大要鈔』の「その決定心によりて、すなはち往生の業はさだまるなり。」の「決定心」に用いられている。HBS では ‘determined faith’⁽⁶²⁾。

下品下生/la plus basse du plus bas degré⁽⁶⁹⁾——「最も低い段階の最も低い所」。

五逆/cinq fautes mortelles⁽⁶⁷⁾——「五つの致命的な過失」。HBS では ‘the five deadly sins’⁽⁶⁹⁾ とされ、SMA も同じである。

極楽/Terre Heureuse⁽⁶²⁾——「幸せの地」。

三学/trois sortes de pensées⁽⁶³⁾——「三種の思惟」。HBS では ‘three disciplines’⁽⁶³⁾。

三尊/《Trois Honorés》⁽⁶¹⁾——「尊敬すべき三人」。法然上人が三昧発得で見た弥陀三尊の「三尊」に用いられている。HBS では ‘the three Honorable Ones’⁽⁶³⁾。

三諦/trois sortes de pensée⁽⁶³⁾——「三種の思惟」。HBS では ‘three aspects of consciousness’⁽⁶⁴⁾。

三福/la triple bonté⁽⁶⁵⁾——「三重の善」。HBS では ‘three good deeds leading to blessedness’⁽⁶⁵⁾。

三昧/extase⁽⁶⁷⁾——「法悦」。⁽⁶⁷⁾ [ec (の外に)+stase (静止)] から成り、ギリシャ語の ‘ékstasis’ (自分の外に立つこと、忘我) から来ている。『アミダ』第7章では ‘samādhi (extase)’⁽⁶⁶⁾ とされている。HBS では ‘meditative ecstasy (samādhi)’⁽⁶⁷⁾ となっている。

三昧発得する/avoir des visions⁽⁶²⁾——「幻を見る」。『アミダ』第7章では、法然上人が、‘Lui-même eut toutes sortes de visions lumineuses.’ (彼自身あらゆる種類のはっきりした幻影を見た。) として、法然上人の三昧発得を述べている。‘vision’ は「(多くは複数で) 幻・幻影・幻覚」⁽⁶⁴⁾ の意味があり、神秘主義者の見る幻影 (visions des mystiques)⁽⁶⁹⁾ にもこの語が使われる。HBS では ‘attain the Sammai (samādhi)’⁽⁶⁶⁾ (三昧に達する) とされているが、建久九年の法然上人三昧発得の所の小見出しには、‘Hōnen’s Many Pure Land Visions’⁽⁶⁷⁾ とされている。

三昧発得記/《Comment j’ai atteint le sammai (samādhi)》⁽⁶³⁾——「いかにして私は三昧に達したか」。HBS では ‘An account of how I attained the Sammai’⁽⁶⁹⁾。

四宗大乘/quatre sortes de discipline⁽⁶⁵⁾——「四種の学問」。

四種三昧/quatre disciplines⁽⁶⁵⁾——「四つの規律」。

四智/quatre sagesses⁽⁶⁴⁾——「四つの思慮分別」。HBS では ‘the four wisdoms’⁽⁶⁵⁾。

四無畏/quatre ruptures de liens⁽⁶⁴⁾——「四つの鎖の切断」。HBS では ‘the four fearlessnesses’⁽⁶⁵⁾ (四つの恐れのないこと)。

十悪/dix actes criminels⁽⁶⁶⁾——「十の行いの罪」。HBS では ‘the ten evil deeds’⁽⁶⁷⁾。

十念/dix pensées⁽⁶⁵⁾——「十の思い」。『観無量寿経』の下品下生の段で、善友のすすめる「十念」の仏訳である。SMA では、「具足十念」を ‘completed ten times the thought’⁽⁶⁹⁾ としてあり、『アミダ』第7章もこれと同じく、‘complété dix fois la pensée’⁽⁶⁶⁾ としている。HBS では ‘said it ten times’⁽⁶⁵⁾ とされ、この ‘it’ は ‘the name of the Buddha Amida’ を指している。

浄土教/amidisme⁽⁶⁸⁾——「アミダ教・アミダ主義」。『小学館ロベール仏和大辞典』では「阿弥陀信仰」と訳されているが、『アミダ』第7章で用いられている ‘amidisme’ は、仏教学で使う「浄土教」にあたると思われる。HBS では ‘the Jōdo Buddhism’⁽⁶⁴⁾ が用いられている。

善知識/maitre bon et instruit⁽⁶⁴⁾——「善き知恵ある師」。『観無量寿経』下品下生の段に出てくる「善知識」の仏訳である。HBS では ‘good and learned teacher’⁽⁶⁸⁾。

選択本願念仏集/《Textes relatifs and Voeu originel et au Nembutsu》⁽⁶⁷⁾——「本誓と念仏に関する文集」。HBS で

は“Collection of Passage bearings upon the Original Vow of Amida, in which He chose the Nembutsu out of all other ways of attaining Ōjō.”。仏訳の方は、「選択」の意味が訳されていないし、「本願」と「念仏」の関係も示されていない。

南無阿弥陀仏/Namu Amida Bustu (Sauve-moi, ô toi, Bouddha Amida)——「ナムアマミダブツ（私を救いたまえ、ああ、あなた、ブッダアミダ）」。HBS には、Namu Amida Bustu に、“Oh save me, thou Amida Buddha.” という英訳がつけられている。

法皇/empereurs en froc——「法衣をまとった皇帝」。HBS では ‘Imperial Bonze’。

瞑想/méditation——「沈思黙考」。仏教の「禅定」に相当する所に用いられている。

礼讃/hymne——「賛歌」。住蓮・安楽のとなえた六時礼讃の「礼讃」に用いられている。カトリックでは ‘hymne’ は典礼歌を指す。

3. 内容について

[歌等のフランス語訳について]

法然上人の歌については、『アミダ』第7章では、アーサー・ロイド (Arthur Lloyd) の英訳をフランス語に訳して載せている。以下、法然上人の月かげの歌を、原歌・仏訳とそれの和訳・アーサー・ロイドの英訳・HBS の英訳——の順に並べて比較してみる。

月かけのいたらぬさとはなけれども
なかむる人のところにそすむ

(仏訳)

Dans tous les pays, il n'est pas un hameau,
Si humble, si reculé, que la lune d'argent
Ne touche de ses rayons. Mais lorsqu'un homme
Ouvre sa fenêtre et regarde au loin,
La vérité du ciel entre et demeure avec lui.

(全ての国で、どんなに貧しいはるか遠くの小さな村であっても、銀の月の光の至らぬ所はない。けれども人が自分の窓を開いて遠くを眺める時、天空の真理は入り込み彼の所にとどまる。)

(ロイド英訳)

In all lands no tiniest hamlet lies,
How'er remote, but that the silver Moon
Touches it with its rays. But when a man
Opens his windows wide and gazes long,
Heaven's Truth will enter in and dwell with him.

(HBS)

There is no place where the moonlight
Casts not its cheering ray;
With him who has the seeing eye
Alone that light will stay.

ロイド訳は姉崎氏も指摘しているように、原歌の簡素な純粹さに欠けており、だいぶの意識である。HBSの方が原歌に近い。リュバック神父は、ロイド訳とHBSは見ているのだが、日本語の原歌は恐らく見ていないのだろう。そのため意識されて細かく描写されているロイド訳を、フランス語に訳したのだろう。(筆者としては、リュバック神父が、ロイド訳もHBSの訳も、同じ月かげの歌を訳したものだとは知っていたかどうか疑問である。)

次に『一枚起請文』紹介の箇所についてであるが、その『起請文』の最後の文句が、原典とだいぶ異なっている。以下、原文・仏文とその和訳・HBSの英訳・HJRの英訳——の順に並べてみる。

念佛を信ぜむひとは、たとひ一代の法をよくよく學せりとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者のふるまいをせずして、一向に念佛すべし

(仏文)

Mon conseil suprême est que les plus savants, laissant tout pédantisme, ne se fient pour leur salut qu'au seul nembutsu.

(私の最後の教えは、一番の学識者たちは、全く学者ぶることをうち捨てて、ただ念仏だけを自分の救いのために信じなさい、ということである。)

(HBS)

Those who believe this, though they clearly understand all the teachings Shaka taught throughout his whole life, should behave themselves like simple-minded folk, who know not a single letter, or like ignorant nuns or monks whose faith is implicitly simple. Thus without pedantic airs, they should fervently practise the repetition of the name of Amida, and that alone.

(HJR)

However extensively one may have comprehended the teachings propounded during the lifetime of Sakyamuni, he should, as soon as he has put faith in salvation, regard himself as an equal of the most ignorant, and thus should whole-heartedly practise Nembutsu in company with any simple folk, entirely giving up the demeanour of a wise man.

原典に忠実な訳は HBS であり、HJR も原典にほぼ忠実な内容である。ところが、『アミダ』第7章の仏文は、原典よりも欠けている所が多く、仏訳とは言い難い。それでは、著者による要約かといえば、要約にしては肝腎な所が誤っている。この仏文では、法然上人は一番の学識者たちに念仏を信じなさい、と説いているように受取れるが、原典では、念仏を信じようとする人に知者のふるまいをしないで念仏しなさい、と説いているのである。リュバック神父は、HBS も HJR も読んでいるはずなのだが、なぜこのような文になったのだろうか。

[年齢・日付について]

法然上人の亡くなった月日とその年齢を、『アミダ』第7章では、

Il devait mourir à Otani, le 7 mars 1212, âgé de soixante-dix neuf ans.

(彼は1212年3月7日79歳で、大谷で亡くなった。)

としている。普通、法然上人の祥月命日は正月二十五日とされているが、これを3月7日としたのは、HBS に、上人の亡くなった日を 'the twenty fifth day of the first month of the second year of Kenryaku (March 7. 1212)' としているのに依る。HBS では陰暦を陽暦に直して括弧内に記しているのだが、陰暦と陽暦は毎年月日はずれるので、陽暦の3月7日が必ずしも陰暦の正月二十五日とはならない。たとえば、1989年の陽暦3月7日は陰暦の正月三十日であり、1988年の陽暦3月7日は陰暦の正月十九日である。HJR では、上人の亡くなった日を 'the 25th day of the first moon (Feb. 29th in Julian calendar)' とし、ユリウス暦(旧太陽暦)を用いて、2月29日として括弧内に記している。

現在の日本では、陰暦正月二十五日をそのまま陽暦1月25日で受けとめる考え方が、定着している。この辺の事情を、陽暦を用いてきた西洋人にはっきり説明しておかないと、リュバック神父のように、法然上人の亡くなった月日を、3月7日と受取ってしまうことになりかねない。

次に法然上人の年齢であるが、『アミダ』第7章では前出のように、亡くなった歳を、79歳として満年齢で示している。HBS、HJR もともに80歳の数え年で記しており、満年齢を使うようになった現在の日本でも、法然上人は八十歳で往生、とする言い方が一般に使われている。このことも、西洋人に今後説明していく必要がある。

[キリスト教者との比較について]

『アミダ』第7章では、姉崎正治氏が、法然上人とアンジの聖フランチェスコを、同じ信心(dévotion)の中で結びつけたことを述べている。また、ルター派との類似点が、聖フランシスコ・ザビエルとその後継者たちによって認められたとし、この類似点は、西洋の学者のうちで、一種のライトモチーフになったとしている。また、アミダ教とはルター主義の裏返しとする、メナージ(Mainage)神父の説をあげている。

しかし全般的にみて、この章ではキリスト教者の名前をあげるだけで、法然上人とどこが似てどこが違うかということについては、具体的に突っ込んで、触れられていない。

[法然上人の念仏について]

『アミダ』第7章では、法然上人については、HBS や HJR に基づいて紹介されている。その中で、著者リュバック神父の意見とみられる所は、法然上人の念仏についてである。著者は、法然上人が念仏を必要かつ十分としたのに対し、「法然は、正確に善導を解釈したのだろうか。その事はどうも疑わしい。」として疑問を投げかけ、法然上人が除こうとした瞑想的または観想的な精神の恵念を、善導大師は教えたのではないかとしている。さらに、『観無量寿経』にも念仏以外の精神訓練の行が説かれていることをあげている。

しかし、著者は、『観無量寿経』は念仏の利益を強く言いたいがために、まず先に多くの他の事を示したと思われるとして、いくつかの難点はあるにせよ、経典は法然の解釈を十分に裏づけており、このことと、アミダ教に与えた法然の方

向性は、評価されうるとしている⁰⁰⁹。また、善導大師の説く瞑想的・観想的要素については、善導が阿弥陀の憶念を常に抱き続けたのと同様のことを、法然も人にすすめており、『選択集』も三部経の読誦や阿弥陀仏への礼拝等、色々な実践行をすすめている、としている⁰¹⁰。しかし、「彼の考えでは、これら全ては、信心または儀式の実践にすぎず、多かれ少なかれ、必要な精神的訓練の実践ではない。もう一度いうなら、念仏それだけで十分である。」と述べ、『一枚起請文』の「このほかにおくふかきことを存ぜば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし」の文句をあげている⁰¹¹。

著者は、法然上人が念仏それだけで十分とした点で、善導大師とはいく分異なっていると考えている。しかし、その点を批判しているのではなく、法然上人が説いた念仏が、個人の力に依らず、阿弥陀仏の力に依る救いの念仏である点を、評価しているようである⁰¹²。

〈結 語〉

以上、『アミダ』第7章「法然と浄土宗」について調べてきたが、著者のリュバック神父は、異教の法然上人とその教えに対し、それほど大きな誤解はしていないし、批判的でもないように思われる。むしろ、信仰に於て共通性を見出そうとしているようである。しかし、和文・漢文の原典を読んでいないので、法然上人の言葉を直接理解していない。そのため、例えば『一枚起請文』の紹介では、愚鈍の身になしての念仏が抜けている。

けれども、今から30年前に、これだけのことがフランスのカトリック神学者によって著わされたことは、評価できる。

尚、この『アミダ』で、法然上人と浄土宗がとりあげられたのも、石塚龍學・H. H. コーツ両師の努力によって、60年も前に全955ページの詳細な英訳法然上人伝が出版されたからである。これが出なかったならば、リュバック神父も、ここまで法然上人のことを著わすことはできなかったであろう。

（謝 辞）

『アミダ』第7章を訳すにあたり、仏文学者 日比野智先生に多くのご教示を受けた。仏教用語については、佛教大学 佐藤健先生にご指摘頂いた。また、大正大学 廣川堯敏先生より『アミダ』の原書のコピーを、佛教大学 藤本浄彦先生より HBS の原本を頂いた。

ここに深く感謝申し上げる。

〔略 語〕

HBS—《Hōnen the Buddhist Saint》（詳しくは本文‘1.参考・引用文献について’参照）

HJR—《History of Japanese Religion》（詳しくは本文‘1.参考・引用文献について’参照）

SMA—《The Sūtra of the Meditation on Amitāyus》（高楠順次郎英訳『観無量寿経』浄土宗全書第23巻 p.461～p.502 浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局発行 山喜房佛書林発売 昭和47年）

『勅伝』—『勅修御傳法然上人行状繪圖』（恵谷隆戒編 平樂寺書店発行 昭和18年）

『ロベール』—『小学館ロベール仏和大辞典』（小学館発行 1988年）

註(1)『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局発行 1986年）p.1812a. / (2) 筆者の所有している HBS は、昭和24年、世界聖典刊行協会より再版されたものである。 / (3) 『アミダ』 p.155—156, n.1. / (4) これら以外に、註に用いられている文献は40を数えるが、紙数の関係でこれら載せるのを省く。 / (5) 『アミダ』 p.173. / (6) 『勅伝』 p.338. / (7) HBS p.729. / (8) 『アミダ』 p.157. / (9) 『ロベール』 p.2040b, c, p.2123a. / (10) HBS p.185. / (11) 『ロベール』 p.2123a. / (12) 『アミダ』 p.167. / (13) HBS p.729. / (14) 『アミダ』 p.157. / (15) 『ロベール』 p.1621a, p.2040c. / (16) HBS p.276, p.277. / (17) 『アミダ』 p.169. / (18) 『アミダ』 p.168, 同 p.170 には‘Sūtra de la Méditation sur Amitāyus’ とある。尚『アミダ』では、‘sūtra’ は ‘sutra’ というふうに長音符号が全てに付けられていないが、本論文では、他の文献との関係上、長音符号を付加した。 / (19) HBS p.245. / (20) SMA p.461. / (21) 『アミダ』 p.162. / (22) 『勅伝』 p.106. / (23) HBS p.350. / (24) 『アミダ』 p.171. / (25) 『アミダ』 p.171. / (26) HBS p.338. / (27) SMA p.498. / (28) 『アミダ』 p.157. / (29) 『アミダ』 p.162. / (30) HBS p.186, 同 p.196 では ‘three learnings’. / (31) 『アミダ』 p.164. / (32) HBS p.210. / (33) 『アミダ』 p.169. / (34) HBS p.673—674. / (35) 『アミダ』 p.171. / (36) HBS p.569. / (37) 『アミダ』 p.169. / (38) 『ロベール』 p.825c, p.2293a. / (39) 『ロベール』 p.997a. / (40) 『アミダ』 p.169. / (41) HBS p.37. / (42) 『アミダ』 p.164. / (43) 『アミダ』 p.164. / (44) 『ロベール』 p.2531b. / (45) 『クラウン仏和辞典』（三省堂発行 昭和54年） p.1400a. / (46) HBS p.207. / (47) HBS p.206. / (48) 『アミダ』 p.164. / (49) HBS p.207. / (50) 『アミダ』 p.162. / (51) 『アミダ』 p.169. / (52) 『アミダ』 p.163. / (53) HBS p.343. / (54) 『アミダ』 p.163. / (55) HBS p.343. / (56) 『アミダ』 p.171. / (57) HBS p.338. / (58) 『アミダ』 p.171. / (59) SMA p.499. / (60) 『アミダ』 p.171. / (61) HBS p.736. / (62) 『アミダ』 p.157. / (63) 『ロベール』

p. 86b. / (64) HBS p. 53. / (65) 『アミダ』 p. 171. / (66) HBS p. 499. / (67) 『アミダ』 p. 168. / (68) HBS p. 252. / (69) 『アミダ』 p. 162. / (70) HBS p. 350, n. 3. / (71) 『アミダ』 p. 156. / (72) HBS p. 32. / (73) 『アミダ』 p. 169. / (74) 『アミダ』 p. 166. / (75) 『ロベール』 p. 1245a. / (76) 『勅伝』 p. 236. / (77) 『アミダ』 p. 165. / (78) HJR p. 174. / (79) HBS p. 544. / (80) HJR p. 175. 姉崎氏は、故人となった友人であるアーサー・ロイドの記念として、彼の訳を載せたことを記している。/ (81) この月かげの歌の他にも『勅伝』巻30の春の歌や、『勅伝』巻34の兼美への返歌「露の身は」の歌等、法然上人の歌が仏訳されているが、いずれもだいぶの意識である。/ (82) 『勅伝』 p. 338. / (83) 『アミダ』 p. 167. / (84) HBS p. 729. / (85) HJR p. 178. / (86) 『アミダ』 p. 166. / (87) HBS p. 638. / (88) 『一九八九年版浄土宗寶曆』(浄土宗発行 1989年) p. 16. / (89) 『昭和六十三年戊辰年福壽曆』(鹿島秀峰編著 神宮館製作 朝日販売サービスセンター発行 昭和62年) p. 8. / (90) HJR p. 178, n. 2. / (91) HBS p. 638. / (92) HJR p. 179. / (93) 『アミダ』 p. 158. 同 p. 158, n. 9. によれば、Masaharu Anesaki, 《Buddhist Art in its relation to Buddhist Ideals, with special reference to Buddhism in Japan》(Boston—New-York, 1915) p. VII があげられている。/ (94) 『アミダ』 p. 158—159, フランシスコ・ザビエルの書簡は、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』(河野純徳訳 平凡社 発行 1985)として出版されており、日本浄土教について報告されている箇所があるが、私見では、ルター派との類似点の述べられている所は、見当らなかった。(89) 『アミダ』 p. 159—160. ここで、Mainage, 《Le Bouddhisme》(1930), p. 190. からの文「ルターにとって、いやされない人間の墮落は、キリストの恩寵で覆われており、アミダ教にとっては、人間であることの本質的な善良さを取り囲んでいるのは、悪だけであり、その悪は人間を墮落させえない。」をあげている。/ (95) カール・バルト、ストラスブールのドミニコ派のニコラス等があげられている。/ (96) 『アミダ』 p. 170. / (97) 『アミダ』 p. 170. / (98) 『アミダ』 p. 170—171. / (99) 『アミダ』 p. 171—172. / (100) 『アミダ』 p. 172. / (101) 『アミダ』 p. 172. / (102) 『アミダ』 p. 172—173. / (103) 著者は、はっきりと「法然上人の念仏を評価する」とは述べていないが、法然上人の数々の法語をあげてまとめていくのを見れば、決して批判的でないことがわかる。/ (104) 石塚師は、1881年青森県に生まれ、浄土宗僧侶となり、東大の哲学科を卒業した。伝道講習院教授、浄土宗大学教授、海城中学校長、芝中学教頭等を歴任、深川靈巖寺の住職となってからは、自坊の復興につとめた。1937年浄土宗布教師会会長になったが、1945年、第二次大戦の東京空襲で亡くなった。(『浄土宗大辞典』1. p. 60) H. H. コーツ師は1865年生まれのカナダの宣教師で、1890年来日。東洋英和学校(後の青山学院大学)教授となり、日本文化の研究にも従事した。1934年名古屋で亡くなった。(『キリスト教人名辞典』p. 566)